

主 題：勝利者とは弱さを知っている者

聖書箇所：コリント人への手紙第一 10章1-13節

「失格者になりたくない」、それがパウロの決意でした。ですから、パウロは主の前を正しく歩み続けようとしたのです。主からいただいた務めをしっかりと忠実に果たし続けていこうとしました。間違いなく彼が望んだことは、主の前に立ったときに、信仰生活のほうびをいただくときに、「よくやった。良い忠実なしもべだ。」という主からのことばをいただくことでした。そのことを願って彼は生きたことは言うまでもありません。怠け者でありたくなかったし、そのように主から言われたくなかった。これこそが私たちひとり一人、信仰者の願いであり目標ということが出来ます。しっかりと信仰のレースを走り切ること、しっかりと主からいただいた務めを果たし切っていくことであると。

パウロは自らの歩みについて話した後、コリント教会が同様に正しく歩んでくれることを願いながら、イスラエルの歩みを例に挙げてこの大切なレッスンを与えようとしています。それは「信仰者としての歩みについて」です。私たちはどのように生きていくのか？そのことをこの10章から教えていきます。

☆信仰者の歩みについて

A. イスラエルへの神の恵み 1-4節

ここには「イスラエルに対する神の恵み」が記されています。

1. 民を導かれた 1節

まず、1節「そこで、兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通過して行きました。」。パウロはここで「兄弟たち」と言っていますが、当然、対象をなっていた人は救いに与っているコリント教会の人たちです。気になるのは、パウロは「私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。」と書いてそのメッセージを伝えるのですが、「私たちの父祖たちはみな、」と書いていることです。

・私たちの先祖：確かに、この後イスラエルについて話をします。パウロにとってはイスラエル民族は自分の先祖です。でも、コリント教会にはユダヤ人以外の異邦人もいたのになぜパウロはこのように言ったのでしょうか？ローマ4：1には「それでは、肉による私たちの父祖アブラハムの場合は、どうでしょうか。」とあります。ですから、民族としては「肉による」と言います。でも、別の箇所ではこのように書かれています。ガラテヤ3：7「ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。」、また、同じガラテヤ3：29にも「もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」と書かれています。つまり、確かに民族としては違っても霊的な意味では私たちはアブラハムの子孫だということです。もっと言えば、神の恵みによって救われた旧約の時代の人たち、イスラエルの人々、彼らと同じように神の恵みによって救われた私たちにとっても、アブラハムは信仰的に霊的に「私たちの先祖」なのです。パウロが言いたかったのはそのことです。ですから、信仰の家系を敢えて言うなら、旧約の信仰者たちは神の恵みによって救われた私たちの先祖だと、そのように言うことができます。

少なくとも、パウロはこの中でイスラエルのいろいろな失敗を教えてくださいますが、その中であって信仰者として主に従った私たちの先祖たちがいるのです。「信仰の先祖たち」です。そのことをパウロはこの後記していきます。1節からパウロは、イスラエルがどれだけすばらしい神の恵みのうちを歩んでいたのかということを教えようとしています。「私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通過して行きました。」と、二つの説明がされています。

・雲の下におり：旧約の出エジプトの出来事をご存じの皆さんからすれば、何のことかはお分かりでしょう。出エジプト記13章にその出来事が記されています。イスラエルはエジプトで奴隷として苦しみを経験していました。神は彼らの祈りに答えられて彼らをエジプトの地から解放していきます。そして、彼らは約束の地へと向かっていくのですが、その道中であって神が何を為さったのか？

13：21-22「21【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。22 昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった。」と、「昼も夜もわたしはあなたがたとともにいるのだ」という神の臨在を彼らに示し続けておられたのです。ですから、イスラエルの民はエジプトを出てから「わたしはあなたがたとともにいる」ということを、実際に自分たちの目で見ながらその道を歩み続けて行ったのです。彼らはすばらしい祝福をいただいていたのです。

・海を通過して行きました：また同時に、エジプトの王パロがイスラエルを解放するのですが、その

後、彼は改めて軍隊を送ってイスラエルを捕えようとします。そのときに、ちょうど紅海に面して人々が不安に駆られていたときに神が何を為さったのか？出エジプト 14 : 15 - 16、21 - 22、29 - 31 「:15 【主】はモーセに仰せられた。「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル人に前進するように言え。:16 あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真ん中のかわいた地を進み行くようにせよ。」 「:21 そのとき、モーセが手を海の上に差し伸ばすと、【主】は一晩中強い東風で海を退かせ、海を陸地とされた。それで水は分かれた。:22 そこで、イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を、進んで行った。水は彼らのために右と左で壁となった。」 「:29 イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を歩き、水は彼らのために、右と左で壁となったのである。:30 こうして、【主】はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見た。:31 イスラエルは【主】がエジプトに行われたこの大いなる御力を見たので、民は【主】を恐れ、【主】とそのしもべモーセを信じた。」

確かに、イスラエルはこのように神が彼らとともにおられたので約束の地まで守られたのです。このような祝福に彼らは与っていました。

2. 霊的リーダーを立てられた 2 節

2 節には「そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、」とあります。今、私たちがバプテスマのことを考えるなら、バプテスマとは救われたクリスチャンたちがキリストと一体であることを証する行為です。バプテスマによって救いに与ることはありませんが、イエスを信じる信仰によって救われた私たちは、見える形で「私はイエス・キリストとともに死に、イエス・キリストとともによみがえった。イエスと私は一つである。」とそのことを証するのが水のバプテスマです。

・モーセにつくバプテスマ : 今のバプテスマがキリストと一体であることを証したように、「モーセにつくバプテスマ」によって彼らがモーセと一体であること、主がお立てになったリーダーであるモーセと一体であったということ、このリーダーシップのもとに彼らは置かれたと、パウロはそのことを教えるのです。そのことを私たちは旧約聖書の中に実際に見る事ができるのです。ですから、確かに神がイスラエルの民を大いに恵まれて民を導いていかれたことは、民に対してすばらしい霊的リーダーをお立てになったことによるのです。ガラテヤ 3 : 27 - 28 にはこのように書かれています。「:27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。:28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」。

3. 神が民の必要を満たされた 3 - 4 a 節

そして、その道中であって神はイスラエルの民の必要を満たされたことが書かれています。「:3 みな同じ御霊の食べ物を食べ、:4 みな同じ御霊の飲み物を飲みました。」、食べ物にも飲み物にも困ることなく、それが必要な時に与えられたのです。エジプトを出て民はシナイ半島に入っていきます。シュルの荒野からシナイ半島を南下して大体一ヶ月経ったときに彼らは「シンの荒野」に到着します。そこはもうほとんどシナイ半島の南の果てです。そこにシナイ山があるのですが、その近くまでやって来ました。

そこで神は何を為さったのか？朝にはパン、夕方にはうずらを与えました。

・食べ物 : 出エジプト 16 : 1 - 4、15 「:1 ついで、イスラエル人の全会衆は、エリムから旅立ち、エジプトの地を出て、第二の月の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野に入った。:2 そのとき、イスラエル人の全会衆は、この荒野でモーセとアロンにつぶやいた。:3 イスラエル人は彼らに言った。「エジプトの地で、肉なべのそばにすわり、パンを満ち足りるまで食べていたときに、私たちは【主】の手にかかって死んでいたらよかったのに。事実、あなたがたは、私たちをこの荒野に連れ出して、この全集団を飢え死にさせようとしているのです。」 :4 【主】はモーセに仰せられた。「見よ。わたしはあなたがたのために、パンが天から降るようにする。民は外に出て、毎日、一日分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを、試みるためである。」 「:15 イスラエル人はこれを見て、「これは何だろう」と互いに言った。彼らはそれが何か知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これは【主】があなたがたに食物として与えてくださったパンです。」、こうして神は彼らに必要なパンを与えられたのです。

・飲み水 : 飲み水もそうでした。彼らがシュルの荒野から下ってシンの荒野に入る前にマラにやって来ました。「マラ」=出エジプト 15 : 23 - 25 「:23 彼らはマラに来たが、マラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、そこはマラと呼ばれた。:24 民はモーセにつぶやいて、「私たちは何を飲んだらよいのですか」と言った。:25 モーセは【主】に叫んだ。すると、【主】は彼に一本の木を示されたので、モーセはそれを水に投げ入れた。すると、水は甘くなった。その所で主は彼に、おきてと定めを授け、その所で彼を試みられた。」、

17 章にはメリバでの出来事が書かれています。民はシンの荒野から旅立ち、旅を重ねて、レフィディムに着きその近くのメリバでの出来事です。そこには民の飲む水がなかったとあります。「メリバ」=出エジプト 17 : 6 「さあ、わたしはあそこのホレブの岩の上で、あなたの前に立とう。あなたがその岩を打つと、岩から水が出る。民はそれを飲もう。」そこでモーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりにした。」。

確かにパウロが言うように、イスラエルの民はこうして主から食べ物を得て飲み水も飲みました。敢えて、ここで「御霊の食べ物」「御霊の飲み物」とあるのは、どちらも主によって奇蹟的に与えられたものだからです。

4. 主がともにおられた 4 b 節

四つ目の祝福は4節の後半に「みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。」とあります。「彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。」とは律法学者であるラビの言い伝えから引用したとバークレーはこのように説明しています。「民数記20：1－11には「メリバの水」のことが記されているが、ラビの言い伝えによると、その後、その岩は人々の後から付いて来て、絶えず飲み水を提供したという。これはユダヤ人ならだれでも知っている伝説である。」と。だから、敢えてパウロはだれでも知っている言い伝えを用いて、実際にあなたがたに付いて来た「岩」、しかも「御霊の岩」、パウロは言います。「その岩とはキリストです。」と。

つまり、パウロが言うことは「そういう言い伝えをあなたがたは知っているでしょう。でも、実際はこうだ。モーセに率いられたイスラエルの民、その道中においてキリストがこのイスラエルの民とともにおられたということです。」と。主イエスが彼らに帯同しておられる、同行しておられたということです。

この「岩」ということばに注目してください。このことばは「神」を意味します。申命記32：15に「エシュルンは肥え太ったとき、足でけた。あなたはむさぼり食って、肥え太った。自分を造った神を捨て、自分の救いの岩を軽んじた。」とあります。「救いの岩」、私たちの創造主なる神のことです。また、詩篇89：26にも「彼は、わたしを呼ぼう。『あなたはわが父、わが神、わが救いの岩』と。」と書かれています。神は岩であると言うのです。ですから、パウロは4節で「あなたがたも知っているように、確かに岩がイスラエルとともにいて水を提供した。なぜなら、神である主イエス・キリストがモーセたちとともにいて必要なものを提供して来た。」と言うのです。ということは、主イエス・キリストは受肉前、モーセとともにいたし、イスラエルの民とともにいたし、そして、感謝なことに私たちのところにもいてくださるのです。永遠から永遠に存在されている神であられるお方です。

さて、まとめてみると、すばらしい祝福、すばらしい恵みがイスラエルの民に与えられたこと＝まず、神によってエジプトでの奴隷生活から解放された。また、約束の地まで神がともにおられ彼らの必要を満たしておられた。その道中においても主が常に守られた。雲の柱、火の柱によって彼らを導いていかれた。神が雲の中に、神がこの火の中におられると、そのことを彼らはいつも確信しながら神とともに歩むことが出来ました。確かに、彼らの道中は主の祝福に満たされたものでした。こんな祝福をこんな恵みを彼らはいただいていたと、そのようにパウロは記すのです。

では、その神の恵みにイスラエルの民はどのように答えていったのか？それが5－10節に書かれています。

B. イスラエルの罪 5－10節

1. イスラエルへのさばき 5節

5節「にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。」、
・神のみこころにかなわず：「みこころに」とは「大いに喜ぶ、大変満足する、同意する、一致する」という意味をもったことばです。ですから、直訳すると「彼らの大部分を神はお喜びにならなかった」となります。それがこの5節でパウロが記した意味です。その結果、神は滅ぼされたとあります。この「滅ぼされた」とは「撒き散らされる、打倒される」という意味です。確かに、そのようにしてイスラエルの多くの人々、正確に言えば、ヨシュアとカレブを除くすべての人々は滅ぼされるのです。いっしょにエジプトを出て来た世代の中でこの二人を除いてすべての者が滅ぼされ、その子孫、子どもたちが約束の地へと入って行くのです。そのことを引き合いに出してパウロはコリント教会への教訓とするのです。実際に起こったこと、史実を用いて大切な教訓を与えようとするのです。

2. コリント教会への戒め 6－10節

6節「これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。」、
・私たちへの戒めのためです：これらはパウロたちとコリント教会への戒めなのだと言うのです。「戒め」とは「見本、手本、模範」という意味です。我々の見本、我々の模範であると言うのです。私たちはこの史実からイスラエルの失敗から教訓を学び取る必要があるということです。彼らの間違っただけでなく、彼らが犯した罪にはどのような結果が伴うのかをしっかりと知らなければならないとパウロは言うのです。

「それは、彼らがむさぼったように私たちが悪をむさぼることのないためです。」、彼らは「悪をむさぼ」ったのです。様々な悪です。ですから「悪」は複数形で書かれています。彼らは「欲しがった」のです。ですから、イスラエルは様々な悪を選択した、彼らの失敗を真似てはいけなないとパウロは教えます。彼

らと同じように悪を欲してはならないと。そこでパウロは、彼らの選択した「悪」を四つ挙げて警告をします。

☆イスラエルの人々が選択した「悪」とは

ここで注意して見ていただきたいのは7節、8節、9節、10節は「いけません」ということばで始まっていることです。つまり、これら四つの節はすべて「こういうことをしてはいけないのだ」ということを強調するのです。

1) 偶像礼拝 7節 戒め1＝偶像崇拝者となつてはいけません

7節「あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拝者となつてはいけません。聖書には、「民が、すわっては飲み食いし、立っては踊った」と書いてあります。」「偶像崇拝者」とは「偶像の奴隷」という意味です。この二つのことばによって「偶像崇拝者」になっているのです。

史実 = 出エジプト記32章にその悲しい様子を見ます。モーセはシナイ山に上って神から十戒をいただきます。それにかなり手間取っていたので麓にいたイスラエルの民は不満を言います。32:1-6「:1 民はモーセが山から降りて来るのに手間取っているのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。」:2 それで、アロンは彼らに言った。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪をはずして、私のところに持って来なさい。」:3 そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持って来た。:4 彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鑄物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ」と言った。:5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼ばわって言った。「あすは【主】への祭りである。」:6 そこで、翌日、朝早く彼らは全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえを供えた。そして、民はすわっては、飲み食いし、立っては、戯れた。」

書かれている通り、こういうことが実際に起こったのです。皆さんに考えていただきたいことは「なぜ、金の子牛を作ったのか？」です。「牛」とはエジプトの神、エジプトの偶像です。エジプトでは大変有名な偶像でした。不思議だと思いませんか？「神はただ一人だ」と信じるイスラエルの民がなぜこのようなリクエストをしたのか？です。神に対する冒涇だということは明らかです。よく考えてみてください。イスラエルの民はエジプトにどれだけの期間いましたか？430年間です。彼らはこのエジプトの地においてどれ程異教の影響を受けていたのか、恐らく、様々な面で妥協が為されていたのでしょう。敢えて、パウロがこのことを引き合いに出しているのは、実は、コリントの教会も同じようなことをしていたからです。コリントの町にも無数の偶像が存在するのです。そういう社会に人々は育ったのです。ですから、ある人たちは救われてもなかなかこの偶像崇拝から完全に分離することができないのです。

そこでパウロは敢えてこのことを引き合いに出すのです。7節後半に「聖書には、「民が、すわっては飲み食いし、立っては踊った」と書いてあります。」とあります。2017年版新改訳聖書には「立っては踊った」が「立って戯れた」となっています。民数記32:6にも「立っては、戯れた。」となっています。様子が分かります。この偶像の周りに人々が集まってどんちゃん騒ぎをやっているのです。というのは、この「踊った」ということばは「笑い、笑い声」という意味でそれがあたかも聞こえて来るような様子です。

さばき = この人たちに何が起こったのか？民数記32:28には「その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。」と書かれています。神は偶像崇拝の罪をお赦しにならない。もちろん、それ以外の罪も同じです。でも、実際に、この人たちは偶像を作りその前で喜び踊っていたのです。その人たちに神はこのようなさばきを下されたのです。「偶像」と言ったとき、人間が作った何かの像だけではなく、私たちの日常の生活の中で偶像としているもの、偶像となっているものがありますか？つまり、神よりも大切なものは偶像なのです。十戒の教えを見てください。出エジプト記20:4、5「:4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。:5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。」

「偶像崇拝」とは「偶像の奴隷」であると見ました。それを自分は愛して止まない、そのためならいのちを捨てても構わないと、それは有名なスターかもしれない、歌手かもしれない、趣味かもしれない。神よりも大切なものは偶像なのです。私たちが教訓としなければならないことは、神はただお一人であること、神でないものを神として扱うなら神はその罪を怒られます。ですから、こうして偶像崇拝者になつてはいけない、彼らと同じようなことをしてはいけないとそのことをまずパウロは言います。

2) 姦淫 8節 戒め2＝姦淫をしてはいけません

8節「また、私たちは、彼らの中のある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることはないようにしましょう。彼らは姦淫のゆえに一日に二万三千人死にました。」、これも実際に起こったことです。

史実 = 民数記 25 : 1-3 「:1 イスラエルはシティムにとどまっていたが、」、イスラエルの民がエジプトを出て死海の東側、今まさに彼らはヨルダン川を渡って約束の地エリコに入ろうとしているそこに来たときです。「民はモアブの娘たちと、みだらなことをし始めた。:2 娘たちは、自分たちの神々にいけにえをささげるのに、民を招いたので、民は食し、娘たちの神々を拝んだ。:3 こうしてイスラエルは、パアル・ペオルを慕うようになったので、【主】の怒りはイスラエルに対して燃え上がった。」、

さばき = 民数記 25 : 9 にこのように書かれています。「この神罰で死んだ者は、二万四千人であった。」と。神はこの罪に対してこのようなさばきを下されたのです。こうして見るときに、神はこのような罪に対してどのような思いをお持ちなのか？そのことを私たちは忘れてはならないのです。実際に、神はこの罪へのさばきを下されました。だから言います。「姦淫をしてはいけない」と。

3) 主を試みること 9 節 戒め 3 = 主を試みてはいけません

9 節「私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。彼らは蛇に滅ぼされました。」、「試みる」とは「試す、テストする」ということです。神の忍耐をテストする、試みることです。どこまで自分の我儘が通るのかを試すのです。主はイスラエルの希望を聞いてマナを与えました。肉が食べたいと言えばうずらを与えました。問題は、彼らはそれで満足しなかったのです。そこで彼らは欲しいものを継続して要求し続けていくのです。まさに、こうして彼らはどこまで許されるのかをテストするのです。

注意しなければいけないことは、罪に対して「これ位なら許されるのではないか」と、これは神を試すことです。私たちが知るべきことは神が罪だと言われたことは「罪」です。私たちもこの恵みの中にいていつの間にか「何をしても構わない、何をしても許される」とそんな中に浸かっていると鈍感になっていきます。パウロは「主を試みてはならない」と言います。

史実 = 実際に何が起こったのか？民数記 21 章に出て来ます。3-5 「:3 【主】はイスラエルの願いを聞き入れ、カナン人を渡されたので、彼らはカナン人と彼らの町々を聖絶した。そしてその所の名をホルマと呼んだ。」、神からこのような勝利をいただいたにも関わらず、彼らは旅をする途中で我慢ができなくなって神とモーセに逆らうのです。「:4 彼らはホル山から、エドムの地を迂回して、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中でがまんができなくなり、:5 民は神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」、先ほども見たように彼らは主が与えてくださったものに満足しないのです。今までも見て来たように、神はあわれみ深く彼らの要求に応じて来られました。本来なら、このような恵みに与ったことを主に感謝して主を誉め称えるはずなのに、彼らは満足しないでもっと要求するのです。

さばき = 彼らの中に何が起こったのか？民数記 21 : 6 「そこで【主】は民の中に燃える蛇を送られたので、蛇は民にかみつき、イスラエルの多くの人々が死んだ。」、このことが I コリント 10 : 9 に書かれています。「イスラエルの多くの人々が死んだ。」と。私たちは与えられているものに満足することです。もう何度も学んでいるように、私たちにはいろんな予期にしない出来事が起こります。今のこのコロナウィルスもそうでしょう。でも、私たちはそれを感謝できます。なぜなら、神がすべてのことを良しとしてくださっているから、神がすべてのことを支配しておられるからです。そういう神なのです。

「なぜ、神はこんなことを…？」と思ってしまうかもしれませんが、私たちがしっかりと自分自身に言い聞かせなければいけないことは、「この方は神なのだ。この方はすべてのことをご自分のみこころに沿って為す権利をお持ちなのだ。そして、この方は正しく愛に溢れた神であって、そのご性質に反することを絶対に為さらない。最善のことを為してください。私たちを愛して為してください。」です。それなのに私たちが主に対して不満を言うのは「自分の思い通りにならない」からです。私たちが学ばなければいけないことは、神が為さることを喜んで感謝して受け入れることです。

悲しいことに、彼らは主をこころみ、その後

4) つぶやき 10 節 戒め 4 = つぶやいてはいけません

彼らは神の前に「つぶやく」のです。10 節「また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。」、

史実 = 悲しいことに、イスラエルの民はつぶやくのです。民数記 16 : 1、2 「:1 レビの子ケハテの子であるイツハルの子コラは、ルベンの子孫であるエリアブの子ダタンとアビラム、およびペレテの子オンと共謀して、:2 会衆の上に立つ人たちで、会合で選出された名のある者たち二百五十人のイスラエル人とともに、モーセに立ち向かった。」、彼らは主の幕屋で奉仕するというすばらしい働きを主からいただいていたが、その働きに満足しないのです。そして、神によって立てられたモーセに不満を抱きモーセに逆らうのです。16 : 3 「彼らは集まって、モーセとアロンとに逆らい、彼らに言った。「あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、【主】がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、【主】の集会の上に立つのか。」と。モーセはこう言います。16 : 6、7 「:6 こうしなさい。コラとその仲間のすべてよ。あ

あなたがたは火皿を取り、：7 あす、【主】の前でその中に火を入れ、その上に香を盛りなさい。」、そして、主の判断を仰ごうとします。彼らが主の幕屋に立ったときに何が起こったのか？ 16：31-33「：31 モーセがこれらのことばをみな言い終わるや、彼らの下の地面が割れた。：32 地はその口をあけて、彼らとその家族、またコラに属するすべての者と、すべての持ち物とをのみこんだ。：33 彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅び去った。」35節「また、【主】のところから火が出て、香をささげていた二百五十人を焼き尽くした。」、41節「その翌日、イスラエル人の全会衆は、モーセとアロンに向かってつぶやいて言った。」、このように人々は焼き尽くされてしまったのです。コラもその家族も、結託した連中が、そして、この二百五十人も、会衆の上に立つ者たち、会合で選出された名のある者たちがこのように神によって滅ぼされたとき、人々はモーセとアロンに向かってつぶやいたのです。どのようにつぶやいたのか？ 41節の終わりに「あなたがたは【主】の民を殺した。」とあります。なぜ、人々は自分の思い通りのことを達成しようとするのでしょうか？なぜ、主が為してくださっていることに満足しないのでしょうか？

さばき = 何が起こったのか？ 16：49には「コラの事件で死んだ者とは別に、この神罰で死んだ者は、一万四千七百人になった。」と書かれています。

これが史実です。歴史上に実際に起こったことです。

C. コリント教会への教訓 11-13節

ですから、パウロはこのことを敢えて引き合いに出して11節を見てください。「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。」と言います。こういうことが実際に起こったのだと、そのことを話した後、パウロは11-13節にコリント教会への教訓を記すのです。先ほども言ったように、この「戒め」とは「見本、手本、模範」ということです。「世の終わりに臨んでいる私たち」というのは、主イエス・キリストがこの地上に帰って来るその前の私たちのことです。イエスが地上に帰って来るのを待っている人々、その人たちに対する教訓として与えられるということです。当然、私たちも含まれます。当然、患難時代の信仰者も含まれます。みなにパウロは教えるのです。このような失敗をしっかりと見て、彼らのこのような罪を神はどのように扱われたのかをしっかりと見なさい。そこから学びなさい。この失敗から学ぶのです。この後、どんなことをパウロは教えたのでしょうか？

1. 過信への警告 12節

12節「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」、つまり、「過信」への警告です。「立っている」とは「自分は堅実である」と思っている人です。「私は大丈夫だ」と思い込んでいる人です。「私は信仰がしっかりしていてどんな誘惑に対しても曲げることなど有り得ない」と思っているような、自分自身に自信を持っているのです。こういう人に対して言います。

・倒れないように気をつけなさい : 「倒れないように」とは「真直ぐな状態から倒れて罪を犯してしまう」という意味があります。描けますね？自分はどんな罪の誘惑があっても大丈夫、私は信仰的に大人だからと、この人の弱さは「自分の弱さに気付いていないこと」です。ですから悲劇は、主の助けが常に必要なことも認めず、主に助けを求めようとしません。私たちはみな神の助けが必要なのに…。24時間、365日、常に瞬間瞬間、神の助けを必要とする者なのに…。

皆さんもよく憶えておられるようにパウロは「私はどんなことでもできるのです」とは言いませんでした。まさに、この人たちはそのようでした。「私は大丈夫、どんなことでもできる」と言います。パウロはこう言いました。「私は、私を強くくださる方によって、どんなことでもできるのです。」（ピリピ4：13）と。つまり、パウロは私たち信仰者の力は神だと言っているのです。そのことを認識していないと言います。神に頼って生きなければいけないのに「私は大丈夫！」と思い込んでいるのです。だからパウロは「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」と言うのです。

・イスラエル人の罪は高慢 : 今まで見て来たイスラエル人の歴史を振り返ったときに共通していることはみな「高慢」です。皆、神の前に碎かれているのか？そうではありません。高慢な人というのは教えを受け取ろう、受け入れようとしません。まさに、そのような人々が特にこのコリントの町には多かったのかもしれませんが。彼らは様々な知識を誇り合っていたのです。自分が達成したことを誇っていたのでしょう。そこでまずパウロが与えたレッスンは「過信への警告」です。

2. 信頼への奨励 13節

13節からパウロは「主への信頼」を奨励します。益々主を信頼するようにとパウロは励まします。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えることのできないような試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられることのできるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」と。

・試練 : 面白いことは「…みな人の知らないものではありません。」ということばです。これは「良く

知られている、一般的なこと、共有の」という意味です。だから、あなただけが苦しんでいるのではない、みな同じようなことを経験しているということです。大切なことは、私たちが何かの試練を経験するときに、その試練にどのように立ち向かうかということです。先ほども話したようにこの「試練」ということばは「誘惑、試み、テスト」という意味があって、新約聖書に20回出て来ます。なぜ、こんな意味があるのか説明します。「試練」は神が私たちに与えてくださるテストなのです。それに正しく応答するならそれはあなたの信仰の成長に繋がるのです。でも、正しく応答しなければそれは罪への誘惑となるということです。

いいですか、神が誘惑するものではありません。私たちに与えられる「試練」を正しく受け取らなければ、正しく応答しなければ私たちは罪に陥ってしまうのです。あくまで、私たちの問題は「どんな選択をするか」です。そして、私たちが罪を犯すということは私たちが正しくない選択をするからです。

*** 人が罪を犯すのは、自らが罪を選択するから**

確かに、アダムとエバのこと、エバが誘惑を受けたときに、実際にその木の実を見て本当に美味しそうだったのでしょう。でも、手を伸ばしてそれを取って食べたのは彼女の選択です。彼女の意志です。アダムもエバから手渡された時に、それを彼は自らの意志をもって取って食べるのです。だから、ヤコブが言います。ヤコブ書1:12-16「12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。」、神は私たちが罪に誘惑するものではありません。では、なぜ私たちは罪を犯すのでしょうか？続いてこう書かれています。「14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。」、悲しいことに、私たち信仰者の中にも罪があります。私たちは神を愛して神に喜ばれることを選択したいという気持ちがありながら、かつてのように罪を選択しようという思いもあるのです。

皆さん、思い出しませんか？だから、「立っている」と思ってはいけません。「大丈夫」と思ってはいけません。私たちは大変弱い存在なのです。ですから、私たちが罪を犯したときに覚えなければいけないことは「私が選択したから」です。だれかのせいにはできないのです。私たちが確かにいろんな誘惑を受けたかもしれないけれど、最終的にそれを選択したのは自分であり、もしかすると、私たち自身がその誘惑を歓迎したかもしれません。ですから、神が私たちが罪へと誘惑するのではなく、私たちが自らの意志で選択するのです。こう書かれています。今日のテキストの10:13を見てください。私たちが会った試練はみんなが知っている。なぜなら、それは「共通のもの」だからと。

・神は真実な方ですから : 「真実」、このことばも新約聖書に63回出て来ますが、「忠実」と訳されているのが29回、「真実」と訳されているのが14回、それ以外に「信用、信頼できる、頼りになる、当てになる、確かな」という意味があります。つまり、パウロはここで「主は信頼に値するお方だ、主は約束されたことを必ずお守りになる方だ、どんな時でも偽ることなく常に真実な方である。」と言っているのです。ですから、パウロは「あなたはこのお方に信頼を置くかどうか？」を問うのです。

*** 「あなたはこのお方を信頼するか」が問われている**

このように言います。「あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせることはなさいません。」と。この「耐えること」とは「出来ること、力量、能力」という意味です。ということは、神はあなたの限界を知っておられるということです。それを越える試練を与えることは絶対にないと言っているのです。少なくとも、それは私たちが慰めてくれますね。「会わせる」とは「許可する、許す」ということです、つまり、すべてのことは神が導いておられる、偶然起こっているのではないのです。神が敢えて特別にそれをあなたに与えてくださっているのです。これが神の約束なのです。あなたが耐えられないような試練に会わせることは絶対にないと言うのです。

そして、この約束を記した後「むしろ、耐えることのできるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」と続きます。「脱出の道」とは「逃れる道、手段」のことです。レオン・モーリス師は「この脱出の道ということばは山間の狭い道を意味している。そして、ここのイメージは山に閉じ込められた軍隊が、山道を通して絶体絶命な状況から辛くも逃れるという、その軍隊のイメージなのである。」と言います。皆さん、描けますか？本当に狭い道しかない。絶体絶命の状況に置かれている。でも、その中でそこから逃れていくということです。パウロはこう言います。「脱出の道も備えてくださいます。」と。これは未来形です。このような約束をくださったのです。何のために？「耐えることのできるように、」と書かれています。

まとめるとこういうことです。あなたはいろんな経験をしているかもしれない。いろんな試練で苦しんでいるかもしれない。でも、覚えなければいけないのは、みな同じような経験をしている、「私だけが」ではないということです。そして同時に、「神の約束を覚えなさい」です。神の約束はあなたのそ

の限界を越えてどうすることもできないような試練に会わせることはないということです。そこから逃れる方法、逃れる道をちゃんと備えてくれる。なぜなら、それはあなたがその中にあってしっかりと試練に耐えることができるためです。どんな試練があってもあなたはそれに耐えることができる。それが神の約束であり、それをあなたは信じるかどうかです。

・「試練」の目的

(1) 信仰者を聖める

私たちがよく分かっていることは、いろんな試練を経験するときに、その試練は私たちが聖めるためにくださるものだということです。Ⅰペテロ 1：7「あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのときに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。」、

(2) 信仰を成長させる

また、試練を通して私たちの信仰が成長することも知っています。ヤコブ 1：2－4「2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。：3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。：4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」

最後に、私たちがいろんな試練を経験する時に、もし、あなたが神があなたから遠く離れていると思うなら、それは大きな間違いです。あなたを愛する神はあなたを愛するゆえにそれを与えてくれているのです。そして、そこにはすばらしい神のご計画があり、それは神の栄光を現すだけでなく、あなた自身の信仰の成長にとってもプラスになるのです。あなたがより聖められていくこと、あなたの信仰がより成長するために神は敢えて特別にそれをくださっているのです。だから、どんな試練があなたに降りかかっていようと、このような目的をもって、そして、そのような中でもあなたをしっかりと守ってくださり助けてくださり、その中であなたがきちっと勝利できるように主は助けをくださるのです。

パウロはそのことを言った上で、だから、あなたはこれらのことを聞いた上で、この方を信頼し続けていくのかどうか、どんな時でも約束を信じて信頼し続けていくのかどうかと問うのです。繰り返しますが、信仰者の皆さん、あなたの力はあなたではないのです。あなたの力は神なのです。

先ほども話したレオン・モーリス師は、この 13 節が保証しているものについてこのように言います。「信じる者への慰めと力づけである。我々の信頼は神の変わらぬ真実さに根ざしている。」と。信仰者の皆さん、私たちがどう感じるかとか、どう思うかなどはどうでもいいのです。私たちが信仰者として生きていくために必要なことは「どんな神かを覚えること」です。どんな神がどんな約束をくださったのかです。その方に信頼を置くのです。その約束を信じて生きるのです。それがパウロが生きた生き様であり、そして、このコリントの教会の人たちに願った生き方です。当然、主はこのみことばをもって私たちにも同じことを問われるのです。

あなたはどのように自分の人生を歩んでおられますか？失敗を犯したくない、失格者になりたくない、主に忠実に生きていきたい。それなら、私たちは主の前に自分自身の罪を除いていかなければいけません。そして、主の約束を信じて、そこに信頼を置いて歩んでいくことです。あなたに問われていることは「このすばらしい神を信頼して生きるかどうか」です。

どうか、この方に信頼を置いて、この新しい一週間、しっかりとみことばに従いながら主の栄光を現し続けていきましょう。